

かるがも



第58号

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kodomo>

2023年〈令和5年〉5月

「こどものアドボカシー」

病院長 中島 弘道



新年度を迎えましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

この春入学、進学、就職された方々は、ようやく学校や職場に慣れてきた頃ではないでしょうか？

この春の卒業入学の時期には新型コロナ流行8波が収まり、こども達にとっても大切な行事が無事に開催できたことと存じます。また報道では「お花見」を楽しまれた方も多かったようで、久しぶりの「春」を感じることができました。ただ新型コロナが「5類移行」となり行政の対応が変わるとはいえウイルスそのものは消えたわけではなく、病院ではなおその対応体制を継続していく必要があります。

さて今回は「こどものアドボカシー」という言葉を取り上げたいと思います。アドボカシー (advocacy) には「擁護する、代弁する」という意味があります。これはこどもの声を聴いて本人の意見や気持ちを汲み取り、周囲に働きかける活動を指します。こどもの「声を聴き」、こどもの代わりに「声を上げる」ことです。

児童虐待の悲惨な実態が明らかになる中で、まず児童福祉の分野でこの「こどもアドボカシー」が注目されてきました。そして2019年の児童福祉法改訂では「児童の意見が尊重される仕組み構築を検討すること」とされています。

アドボカシーにはこども一人一人の声を聴き周りが理解し対応することや、集団の声として社会や行政に働きかけていくことまで様々な形があります。まず声を聴きこども自身が声を上げるのを助けること、そしてまわりの人々、施設、機関のスタッフや、家族も含めた市井の人、同じ立場の人や「アドボカシー」の訓練をされた人などの様々な人々が「代弁者」として声を上げることもできます。

社会にはさまざまな困難が存在しています。貧困、格差、そして物価高などの経済問題や温暖化危機、国際情勢不安。それぞれ解決すべき大切な事柄ではありますが、それら「おとなの声」を優先することで、こどもたちの声が後回しにされてきたのが日本の社会であり、世界の中でも遅れているところでした。弱者であるこどもの「声」を大人たちが聴いてこなかったのです。だからこそ、こどもに関わる大人たちが「こどもの代弁者」として社会に働きかけていくことが必要なのです。

こどもの声を聴く社会を実現するには、私たちこども関連施設の人々だけでは足りません。すべてこどもに関わる大人に「こどもの代弁者」になっていただきたいと思います。

この春には「こども家庭庁」の発足など、こどものための政策が進められようとしています。これを良い機会ととらえ「こども真ん中」の社会が実現できるように声を上げていけることを願っております。

2023年度新体制



看護局長 **平野 美佐子**

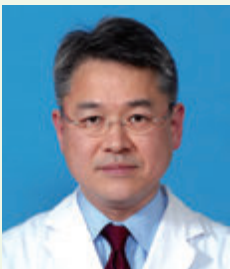
このたび、令和5年4月1日付で看護局長として着任いたしました。

これまでは、長い間救急医療に携わり、千葉県救急医療センターで看護局長を務めたほか、佐原病院、千葉県病院局経営管理課、鶴舞看護専門学校等で勤務をしてまいりました。

こども病院での勤務は初めてであり、外傷以外のこども特有の病気や療養上の問題など、わからないことも多くあります。しかし、こども達やご家族が安心して病院での療養生活を送るための支援ができるよう、看護師一人ひとりの働きやすい職場環境を整え、看護のスタッフをまとめていくことが私の使命であると考えております。それには、これまでの経験を活かして取り組んでいけるものと思っています。

ここ数年間は、コロナ対策のために看護師を外部に派遣したり、院内の病棟編成を繰り返したりと、若干落ち着かない状態が続いてきたのではないかと感じています。新型コロナウイルス感染症患者が減るわけではありませんが、感染対策については、ここ数年で十分に身に付き落ち着いた対応ができるようになってきました。

そこで、今一度、自分たちの看護をしっかりと見つめ直し、より質の高い看護をこども達、そしてご家族に提供できるようにしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



診療部長 **萩野 生男**

平成21年4月から当院に勤務し、心臓血管外科で診療して参りました。このたび令和5年4月1日付で診療部長を拝命しました。業務として外科系診療科の統括、手術室および重症部門(ICU・HCU)の統括、医療安全管理室長補佐、臨床倫理の責任者補佐を担当します。管理業務と従来の専門診療を通して、患者さんに安全で質の高い医療を提供し、当院が高度小児専門医療施設として発展するよう、病院スタッフ全員でチーム医療を実践していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

新任医師紹介



心臓血管部長
梅津 健太郎

このたび、心臓血管外科部長として赴任いたしました。

心臓血管外科は、単独では成り立ちません。手術前には、循環器内科による正確な診断が欠かせず、術後や外来でも遺残病変や段階的治療への対応をお願いすることになります。術中は麻酔科による安全確実な全身管理は必須で、また多くの心臓手術で人工心肺(体外循環)が必要であるため臨床工学技士との連携が不可欠です。そして、仕事場である手術室スタッフとの協働なしではやはり手術が成り立ちません。さらに、心臓の術後は緻密な全身管理が重要なので、心臓だけでなく全身管理に長けた集中治療科・集中治療室スタッフによる濃厚治療なしでは、やはり治療はうまくいきません。その後も一般病棟、地域医療を含む外来治療へと診療が継続されていくことを考えると、とても多くの方の協力があって初めて一つの手術ができるということに気付かされます。

そして、多くの方の協力があるからこそ、例えば一人では到底できないようなことも、なんとかできることがしばしばあります。

チーム全員で、病気のこどもたちに何ができるのか、どうしたら良いのかを毎回考えながら、日々の診療に精一杯取り組んでいきたいと思っております。



循環器内科主任医長
小林 弘信

千葉ロッテマリーンズとジェフ千葉をこよなく愛する循環器内科の小林弘信と申します。千葉県生まれの千葉県育ちで、大学6年間は新潟で過ごしましたが、地元愛から、卒業後は千葉での小児医療に携わりたく、船橋市立医療センター、千葉大学病院で小児科研修をいたしました。小児医療の中でも特に循環器診療に興味を持ち、2014年より2年間、当科で研修し、その後は大学で基礎研究(主に川崎病)などにも従事しました。この度、縁あって再び当科に戻れたことを嬉しく思います。患者・家族とのコミュニケーションを大切に、患者さんに寄り添い、最善の医療を提供できるよう精進する所存です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



耳鼻咽喉科主任医長
外池 百合恵

当院には2021年より勤務しています。それまでは千葉県内の大学病院や市中病院で、成人を含めた一般耳鼻咽喉科診療に従事してきました。

こども病院では、治療に向き合うこども達の姿に日々勇気づけられています。小児難聴の診療などでは、長期にこども達をフォローしその成長を見守ることができるところに、責任とやりがいを感じています。

この度幸運にも正職員採用の機会をいただき、身が引き締まる思いです。これまでの経験も活かして、皆様のお役に立てるよう頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



泌尿器科医長
馬場 晴喜

今年度より千葉県こども病院泌尿器科に赴任しました、馬場晴喜です。昨年度までは千葉県がんセンターに勤務しておりました。それ以前は千葉大学医学部附属病院や成田赤十字病院に勤務していました。これまで主に成人～高齢者の方々に対して診断や治療を行って参りましたが、今回千葉県こども病院に赴任し小児の診療を行うこととなりました。至らないこともあると思いますが、ひとつひとつに真剣に取り組んでいく所存です。プライベートでは3月に第3子が誕生し、仕事でもプライベートでもこどもに囲まれた日々を送っております。精一杯頑張りますのでよろしくお願ひします。



感染症科医長
草野 泰造

2017年から感染症科で診療しており、今年度から医長として採用された草野泰造です。感染症科は、「感染症に詳しい」小児科医としてお子さんの診療を行うだけでなく、他診療科からの治療方針相談(コンサルテーション)や院内の感染管理を担当している診療科です。

複雑な病気をお持ちのお子さんが多いこども病院にとって、感染症科の役割は増しつつありますが、「目の前にいるお子さんをしっかり診る」という小児科医としての初心を忘れることなく、お子さんの健康と安全を守るよう、こども病院の一員として頑張っていきたいです。よろしくお願ひ致します。

整形外科 紹介

皆さんこんにちは。整形外科の紹介をさせていただきます。

私たち整形外科医は斜頸などの首に生じる疾患から、内反足などの足に生じる疾患まで全身幅広い疾患を治療しております。

また、骨系統疾患などの多臓器に関わる疾患や腫瘍、感染症などを扱うことも多く、たくさんの他科の先生方と日頃から連携をさせていただいております。

整形外科では、変形した骨や筋肉を正常な形に戻すことを目指すだけでなく、“今後子ども達が長い人生で手や足がどのように使えれば便利か”を考えて治療に当たっています。

スタッフ一同、日々相談を重ね、子ども達によりよい医療を提供できるよう邁進しております。

最後に、今年度から加わった4人について少し紹介します。

佐久間先生は2019年度に当院で働いていた出戻りの黒ぶち眼鏡のタフガイです。

亀井先生は青森県からはるばる当院にきてくれた黒ぶち眼鏡のナイスガイです。

東先生は奈良県からはるばる当院にきてくれた本年度の紅一点です。

福島先生は千葉大学整形外科教室からきてくれた黒ぶち眼鏡のクールガイです。

今後も千葉県子ども病院、整形外科を、是非よろしく願いいたします。

- 1 氏名 2 出身地 3 子ども病院の好きなところ
4 医者になってなかったら? 5 ストレス解消法 6 休日の過ごし方



- 1 柿崎 潤(かきざき じゅん)
2 山形県
3 こどもがいるところ
4 たぶん医者でしょう
5 寝る
6 家事手強い



- 1 及川 泰宏(おいかわ やすひろ)
2 千葉県
3 7階病棟から見える四季折々の富士山
4 こんなにも充実した毎日を送れてなかったかもしれません
5 落語や音楽
6 散歩



- 1 佐久間 昭利(さくま あきとし)
2 千葉県 木更津市
3 病院全体がこども向けにできていて殺風景じゃなくたのしいところ
4 政治家
5 草とり、プラモデルなど
6 草とり、弓道、ドライブなど



- 1 亀井 敬太(かめい けいた)
2 青森県
3 みんなやさしいところ
4 営業マン
5 歌う、食う
6 料理ストック作り



- 1 東 由貴(ひがし ゆき)
2 奈良県
3 病院の雰囲気穏やかなところ
4 学校の先生
5 テニス、好きなものを食べる
6 こどもと遊ぶ



- 1 福島 駿(ふくしま しゅん)
2 広島県
3 情熱をもったスタッフがたくさんいる所
4 理学療法士
5 お風呂、サウナ
6 おいしいものを食べる

集中治療科 紹介

集中治療科は、昨年テレビドラマの舞台になった小児集中治療室(通称 PICU)を拠点として、常勤医2名が診療をしています。PICUは、主に呼吸・循環が不安定な患者さんが入院している重症の方たちのための病棟です。千葉県こども病院では、3階のフロアに新生児のための集中治療室:NICUとこどものための集中治療室:PICUがあります。こどものためのというとNICUをイ

メージされる方が多いかもしれませんが、PICUは、生まれたての新生児から千葉県こども病院でなければ診療が難しい成人の方まで入室に対応する必要があります。これらの幅広い患者さんに対して、担当科の主治医チームと協力して診療にあたるのが集中治療科医です。入室されている全ての患者さんに関わらせていただいています。

また、当院の集中治療科医は2名とも小児科医であり、小児全般の知識を十二分に有し、加えて小児循環器、集中治療の知識も豊富です。PICU内ではそれらの知識をフルに使って診療にあたっています。外来診療は担当しておりませんが、PICU内での患者さんへの対応のみならず、病院全体での急変時の対応・急変に備えての訓練の実施や、担当科から依頼があれば、退院される前に、ご家族に対して心肺蘇生法の指導にも対応しています。

県内3か所のPICUとは、県内の重症患者さんに対応ができるように定期的にカンファレンスも実施しています。

PICUに入室した患者さんが一人でも多く、笑顔となって退室されるように日々努めてまいります。

- 1 氏名
- 2 出身地
- 3 こども病院の好きなおとこ
- 4 医者になってなかったら?
- 5 ストレス解消法
- 6 休日の過ごし方



- 1 杉村 洋子(すぎむら ひろこ)
- 2 東京都
- 3 適度な大きさと顔の見える関係
- 4 弁護士
- 5 ビールを一杯
- 6 散歩



- 1 粒良 昌弘(つぶら まさひろ)
- 2 千葉県 茂原市
- 3 緑豊かな環境
- 4 起業する
- 5 散歩、甘い物を食べる
- 6 ゆっくりする、図書館へ行く



口唇口蓋裂診療チームの紹介②

はじめまして、形成外科の石垣です。2015年に千葉県こども病院に赴任してから、お子さんの様々な先天的な形態変形症状に対する治療に取り組んできました。その中でも口唇口蓋裂に特に力をいれて診療にあたっております。私が形成外科を志したきっかけは、学生時代の実習で口唇口蓋裂治療を実際に見学し、学び、口唇口蓋裂のお子さんの変形症状が、手術により劇的に改善するのを目の当たりにして、驚きを感じたこと。また、治療に両親が喜んでる姿を見て、大変やりがいのある分野だと興味を持ちました。



石垣 達也

当院形成外科は開院以来、口唇口蓋裂の治療にあたっており、現在、県内だけではなく近隣都県の数多くのお子さんの治療も行っております。初回治療だけではなく、その後の形態修正術や、顎裂部への骨移植術など、関連する手術加療を年間100～120件前後行っており、全国的にもトップクラスの手術件数を誇っています。

さらによりよい治療を提供できるよう、2019年には口唇口蓋裂診療チームを立ち上げました。毎月定期カンファレンスを行い、治療にかかわる様々な職種のスタッフとの連携を強固なものとしております。当院では、日本口蓋裂学会によって認定された口唇口蓋裂治療認定師が3名(医師2名、言語聴覚士1名)が在籍しており、より専門的な治療を提供できる環境が整っております。口唇口蓋裂の治療は、1度や2度の治療のみで終わるわけではなく、ましてや治療は手術だけではありません。長期間にわたり、多職種の経験豊富なスタッフと協力しながら治療を行い、お子さんの成長を継続的に見守っております。

受診のタイミングについて

生後1ヶ月以内に形成外科を受診してください。ただし、お母さんの体調面が落ち着いてからでも問題ありませんので、無理のないタイミングで受診を検討してください。

初診受診後の流れについて

初診は形成外科でお子さんの状態を把握させていただき、今後の治療の内容・時期などの流れについておおまかに説明させていただきます。その後は、必要とされる治療内容に応じて、耳鼻科・歯科・言語聴覚士・助産師など他の診療をスケジュールングさせていただきます。出生後に哺乳がうまくいかないケース(口蓋裂を合併しているお子様では時々あります)は、初診時にご相談いただければ、可能な限り当日に、言語聴覚士または助産師から哺乳指導を行わせていただいております。

出生前受診について

出生前の胎児エコー検査で、突然口唇口蓋裂を指摘され、今後の治療がどうなるのかなど不安を感じることもあります。当院形成外科外来にて、出生前に今後必要と予想される治療やおおよそのスケジュールのお話させていただきます。不安な点にも可能な限りお答えさせていただきますので、受診を希望される場合は、電話で形成外科初診の予約をお取りください(お母さんのお名前でお受診できます。予約時に胎児の口唇口蓋裂の相談とお伝えください)。



令和5年度新採用者(看護職)を迎えて

令和5年4月3日、28名の新規採用看護師が県庁での辞令交付式を終え、千葉県こども病院の新たな仲間に加わりました。緊張と期待に満ち溢れた表情で全体研修が始まり、徐々に仲間との会話も増えました。新採用者の出身校は、22校(12の都道府県)にのぼり、全国各地から専門的な小児看護の実践を目指して千葉県こども病院に集まりました。



研修は、看護師としての倫理、医療安全、看護手順や看護記録などを行い、実践演習となると緊張感が高まっていました。4月12日に配属部署が発表され、看護師として第一歩を踏み出しました。今後は配属先での教育を継続し、月に1～2回の集合研修を行います。

こども病院の看護師として、知識と技術の獲得と人間性を養い、治療するこどもの成長発達を支えられる看護師を目指し頑張ります！

アニマルセラピーはじまるよ！

セラピー犬とのふれあい



ボランティア団体ミルフィーユさんの協力のもと、日本動物病院協会のアニマルセラピーによる人と動物のふれあい活動は、コロナウィルス感染症拡大のため中止となっていました。3月に感染対策を実施の上、久しぶりにセラピー犬を病棟へ招くことができました。



日本動物病院協会 獣医師とボランティアの皆さん

初めてワンちゃんに触れる子は、“おっかなびっくり”セラピー犬のしっぽや背中をそおっーと触ると、泣いて緊張した表情から“にこにこ”の笑顔になりました。

ワンちゃんが大好きという子は、自分の膝の上のせて、ずーっと笑顔…(^ ^)

短い時間でしたが、入院中の子どもたちにとって、とても楽しい時間を持つことができました。



宮下 絹代

こんにちは! 感染管理認定看護師の宮下です。

感染管理認定看護師の役割は、患者さん、職員など、こども病院に関わるすべての人を感染から守る事です。しかし、感染対策は一人で行うことはできません。

当院では感染管理室が設置され、その下部組織として実働部隊の感染対策チーム(Infection Control Team: ICT)が設置されています。

感染管理認定看護師はICTメンバーとして、他のメンバーである感染症科医師、看護師、薬剤師、検査技師と共に、毎週の院内ラウンドを実施し、院内の感染症の発生状況を監視し、感染管理の実践と感染防止教育、抗菌薬適正使用の推進などの活動を行っています。



ICTラウンド前の多職種でのカンファレンス

ICT活動の紹介

● こども病院における感染予防対策の特徴

こども病院に入院、通院する子ども達の多くは、基礎疾患があり感染症に対する抵抗力が低い状態です。さらに子どもの特徴として、成長発達の途中であらゆる機能が未熟なこと、手洗いなどの衛生行動を行うことが難しいこと、日常生活のほとんどに援助を要し、抱っこやおむつ交換、授乳など養育者との濃厚な接触が多いことなどから、患者-職員間の感染リスクは非常に高い状況があるといえます。

● 新型コロナウイルス感染症を経験して

2020年から流行が続く新型コロナウイルス感染症は社会活動に大きな変化をもたらしました。3年間、新型コロナウイルス感染症に対応し様々な対策を行う中で、日常の動作の中にある基本的な感染予防対策の遵守が重要であること、感染予防策は医療スタッフだけではなく、入院前の検温や毎日の体調確認など、こども病院にかかわる子どもや家族の理解と協力で成り立っているということを再認識することができました。

2023年5月8日より新型コロナウイルス感染症が感染症法上5類の位置づけに変更となります。こども病院では感染対策の最適化について、検討や改善に取り組んでいます。その一つとして「手指衛生」の取り組みを行います。感染予防の基本であり、誰もができる「手指衛生」ですが、正しく行うためには訓練が必要です。

● 「手指衛生」について

ここで今まで皆さまにはなじみが薄かった「手指衛生」について説明したいと思います。私たちは日常生活の中でも「手を洗う」という「日常的手洗い」をおこなっています。しかし、病院でスタッフが行う「手を洗う」は特別です。

その目的は目に見える手の汚れを落とすだけではなく、院内感染の原因となりうる様々な細菌を取り除き消毒を行うことで手指を安全なレベルにするために行います。

● ICTで取り組む「手指衛生」

今年度こども病院は「SAVE LIVES - Clean Your Hands CHIBA」という地域のネットワークに参加しました。ここでは、「世界保健機関 (World Health Organization: WHO) の手指衛生多角的戦略」を活用して、病院全体で世界中の病院と共に手指衛生の推進を実践していきます。

皆さまが来院される機会がありましたら、職員が正しい「手指衛生」をしているか、確認のご協力をお願いします。私はICTメンバーとして、子ども達、職員など病院に関わるすべての人を感染から守っていきたく思います。



千葉県こども病院 手指衛生の方法